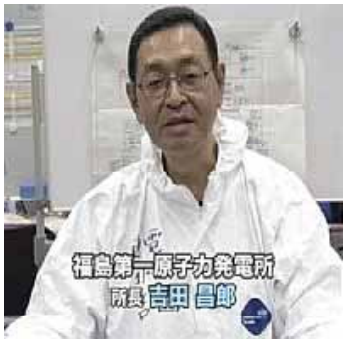
（単位に注意して下さい。1 シーベルト＝ 1000 ミリシーベルト、5 シーベルト＝ 5000 ミリシーベルト。　メートルの 1/1000 がミリ（m)。ミリの 1/1000 がマイクロ（μ））
（時間の単位も要注意、１時間、１日、１月、１年）
福島第一原発の収束作業で、10 月 4 日までに 3 人の作業員の死亡が確認されていますが、被曝による死亡ではなく、持病が悪化したと発表されていますが、3 人とも事故後現場採用されて働きはじめた作業員の方のようです。

◎　Q：「フクシマ・フィフティ」を率いるリーダーはどのような人物なのでしょうか？

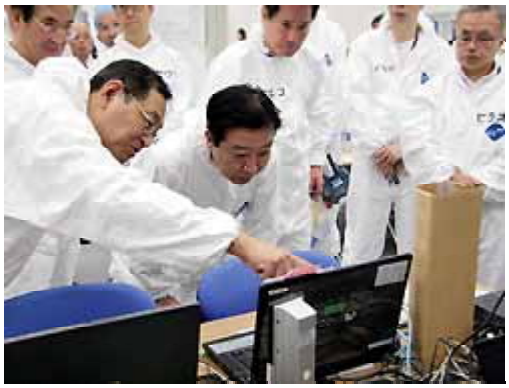


A：福島第一原発の事故現場では、2011 年 10 月 20 日現在事故収束作業として連日約 2700 人達が働いております。中心は東電社員ですが、その他関連機器メーカー、東芝、日立、IHI、関連企業の　関電工、東電環境エンジニアリング、東京電力協力企業、各電力会社、その他、からの派遣、支援の人達です。

その人達を束ねているのが、吉田昌郎福島第一原子力発電所所長（56 歳）です。

プロヒールを紹介します。昭和 30 年大阪府生まれ、東京工業大学工学部卒業、東京工業大学大学院、原子核工学、昭和 54 年修了、東京電力入社、原子力の技術畑を歩み、福島第一、第二発電所の保守課、ユニット課を経て平成 19 年に本店（本社）の原子力設備管理部長に就任しましたが、直後に新潟県中越地震で柏崎刈羽原子力発電所が損傷し、その収束作業の責任者になり、現場で奮闘、その後、平成 22 年 6 月、福島第一原発所長として還ってきました。その職歴を見るように徹底して現場主義で培われた技術者魂でしょう。

身長 180cm の大柄な体格で学生時代はボート部で活躍、豪快、部下には慕われる親分肌、申し分のない現場の長のようです。


（野田首相に説明）

官僚主義に徹していた本社幹部からは、「自信過剰」「本社に楯突く困った奴」と言うのが評価だったそうです。

私見の連想ですが、第二次大戦中悲惨な戦場となった‘インパール作戦’における第 31 師団（烈）は最前線でイギリス軍と戦っていたが、補給が全くなく、弾薬、食量が尽き、独自の判断で撤退を始めたため、師団長佐藤幸徳中将は第 15 軍司令官牟田口廉也中将によって抗命罪を問われ、

親補職であるにもかかわらず解職して軍事裁判にかけた。

31 師団は師団長を欠いたまま、撤退作戦となったが、其の殿（しんがり）を 31 師団歩兵旅団長であった宮崎繁三郎少将(当時、後中将)が引き受け旅団が一丸となって見事な作戦で戦死者、餓死者もださず、あの理不尽がまかり通った日本陸軍において、将軍から一兵卒まで一致団結して見事作戦を遂行できたのは宮崎旅団長の才能、人徳にあり、部下はこの人のためなら何時でも死ねる、と思っていた、ほどの統率力があったからこそ全員が生還できた、ということでした。